

## 三越のうた

入倉 文子

「白亜高塔天を摩し、赤地に白き越（マルコシ）の・・・」  
小学生の頃、床の中で母が歌ってくれた「三越のうた」の一節だ。

甘えっ子の私は、六年生になっても、冬になると母の布団に潜り込んだ。母親思いの兄からは、「お前、でっかい図体して、いい加減に一人で寝ろ。お母ちゃんが休まらんじやんか。」と半分やきもちのような感じで始終言われたが、知らんぷりして、ずっと母の布団で寝ていた。その頃の母はもち肌ですべすべで、どこもかしこも温かかった。足が冷たいときは、母のむっちりとした太ももにくっつけるとすぐに温かくなった。

布団の中での一番の楽しみは、母の娘時代の話をしてもらうことだった。それは、田舎の小学生の私には夢のような話だった。鰯沢に住んでいた母の一家が東京に移ったのは昭和の初め、母がまだ小学校に上がる前のことだった。私が歴史の資料集の白黒写真でしか知らない二・二六事件の日のこともはっきりと覚えており、その日は大雪で、とにかく学校が休みでうれしかったとよく話してくれた。背が高く、丈夫だった母は健康優良児に選ばれ、嘉納治五郎のメダルをもらったのが自慢だった。

母は学校を卒業するとすぐに日本橋の三越デパートに勤めた。母の話によれば、デパートは東京の娘達にとって憧れの職場で入社試験は厳しく、家庭環境まで詳しく調べられたという。

「白亜高塔」の歌詞のとおり、三越は、当時日本で三番目に大きい、白亜の堂々たる大建築物だった。店内には国内初のエスカレーターが備えられ、多くのお金持ちや有名人でにぎわっていた。特に、時折買物に来る女優の高峰三枝子は、この世の人と思えないほど美しく気品があり、母達の憧れだった。

店員教育は厳しく、お局様のような教育係から徹底して接客マナーをしつけられた。私生活にも制限があり、日焼けは厳禁、海水浴も許されない。でも、千葉の海は電車ですぐそこ。河童のようには泳ぎが好きだった母は、休みの日にこっそりと海に行き、鼻のあたまでの皮がむけて大目玉を食らったそうだった。

母の話の中で強く心に残っているのは、食べ物にまつわる話だ。仕事の帰り、娘達は時々甘味処により、蜜豆を食べる。店主とは顔なじみで、「おじさん、私、蜜豆の豆抜き」「私は豆、山盛りね」

「私、寒天いっぱい、お願い」などとアレンジしてもらおう。娘達が、おしゃべりしながら食べる様子が浮かんでくるようだ。

そして、月に一度の楽しみは給料日のお寿司。神田の立ち食い寿司屋のネタはとびきり新鮮、値段も安い。薄給の母達でもお腹いっぱい食べられたという。母が一番好きなのは赤貝のひもを芯にして巻く細巻きだ。パリッとした焼きたての海苔に、こりこりとした歯ごたえの貝のひも、わさびは涙が出るくらい多めに入れてもらう。

私は寿司と言えばたまに食べる近所の寿司屋のたれがかかった田舎風の大きな握りや伊達巻きを巻かずしぐらいしか知らなかった。だから、早く大きくなって神田の屋台で寿司を食べたいと、母の話に聞き惚れた。

これらの話も忘れられないが、最も印象深いのが三越の役員食堂の話だ。そこには重役以上の、母達にとつては雲の上の存在の偉い人たちが昼食を取りに来る。そこで出されるものはカレーひとつでも特別で、角切りの牛肉たっぷり、香り高いカレーの上には卵黄がトッピングされ、何種類もの色とりどりの薬味がガラスのポットに入れて添えられ、デザートはマスクメロンと言った具合だ。

ある日、母の同僚が社長のお給仕を命じられた。フルコースの食事である。その時、風邪を引いていたその娘はあついコンソメスープを運んでいるうちに鼻水が止まらなくなり、テーブルに置いた途端スープの中に鼻水を垂らしてしまった。ぱつと頬を赤らめ、娘は謝ることも出来ず、厨房に逃げ帰ったと言う。

この話を聞く度に、澄んだスープの中に糸を引きながらぼとりと落ちる鼻水と、啞然としてそれを見る立派な口ヒゲの社長の姿が浮かんでくる。そして、娘の恥ずかしさが我が事のように感じられて胸が切なくなるのだった。

浮き沈みの激しい父に翻弄され続け、苦勞の絶えなかった母にとつて、三越時代の記憶は心の支えだったのだろう。三越の話をするとときの母の声はつやがあり若々しかった。

考えてみれば、それは昭和十年代の半ば、国家総動員法が成立し日中戦争も始まっていたはずだが、母の話はあくまでも明るく楽しいものだった。母は繰り返して語り、私も飽きもせず床の中で母にぴったり張り付いて聞き、東京への憧れを強めていった。

母は音痴を恥ずかしがり、鼻歌さえもめつたに歌わなかった。だからこそ、話の最後に時々歌ってくれた「三越のうた」は今も

忘れられない。

「勇者の意気を君見ずや、これ三越の姿なり・・・」

音程が不安定なのを気にしてか、か細くふるえる声で歌った。そして、必ず言う、うっとり夢見るように。

「ああ、やっぱり東京はいいなあ。年取ったら東京に住みたいなあ」

母にとって、三越は青春そのものであり、東京は帰るべきふるさとだった。

母は三越で働きながらタイピスト養成の夜学に通い、生命保険会社に転職し、山梨に疎開するまで勤めていた。タイピスト時代の話を余りしなかったのは、戦局が悪化し、暮らしに暗い影を落としていたからだろう。

母が東京に最後に行ったのは六十一歳の早春、死の半年前のこと。膵臓ガンと診断され、一縷の望みを持って東大病院に入院した時だった。開腹はしてみたものの、膵臓全体がガン化していて、手の施しようがなかった。告知は受けていなかったが、母は命の終わりを悟っていたのだろう。二ヶ月後、甲府に帰ることになり、寝台自動車の窓から、初夏の日差しあふれる東京の町並みをじつと見つめていた。

先日、伯母の七回忌の法要が、東京駅近くのホテルであった。その帰りの車中で、ほろ酔い加減の兄がぼつりと言った。

「東京はいいよなあ。俺も、子供達が仕上がったら東京に住みてえよ。ちっちゃいマンションでも買ってさ」

車窓には、夕闇の中に赤くライトアップされた東京タワーが浮かんでいる。

不意に兄が、かすれた声で歌い出した。

「白亜高塔天を摩し、赤地に白き<sup>④</sup>の・・・」

三越のうただ。兄もこの歌を覚えてるなんて思ってもみなかった。

ああ、母そっくり。調子っぱずれで、声がふるえて。やっぱり兄も母の子なのだ、当たり前前のことなのにふつと涙があふれた。

平成二十二年度 山梨県県民文化祭エッセイ部門 最優秀賞